

久保田万太郎集
長與善郎集
室生犀星集

杉浦非水装幀

改造社版

昭和五年十月九日印刷
昭和五年十月十二日發行

現代日本文學全集 第四十四篇

著者

久長室
保田萬太
與犀生
星郎郎

發行者

山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印刷者

杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目四〇番地

改造社

振替東京八四〇二番
電話芝(41) 四三二二番
社番番番番

「久保田・長與・室生集」目次

久保田万太郎集

卷頭寫眞(照影)

序 詞(筆蹟)……………四

小説篇

末^{すゑ} 枯^{かれ}……………五

續^{つづ}末^{すゑ} 枯^{かれ}……………二九

九^く月^{がつ} 嶠^{がき}……………四三

續^{つづ}九^く月^{がつ} 嶠^{がき}……………五五

弟^{てい}子^し……………六三

いのち……………六六

寂^{さび}しければ……………七一
身^みの末^{すゑ}……………二九

戯曲篇

あぶらでり……………一三

大^{おほ}寺^{てら}學^{がく}校^{かう}……………一五四

ゆく年^{とし}……………一九四

冬^{ふゆ}ざれ……………二二七

浮^{うき}世^よ床^{どこ}小^{せう}景^{けい}……………二三五

雨^{あま}空^{そら}……………二四七

(附) 春、夏(句)(三) 夏つゞき、秋、冬(句) 四二 冬つゞき

(句)、『日暮里雜記』より(五四) 同(六二) 獨樂の藝(六五)

夏(句)(二六) 夏つゞき、秋(二九) 秋つゞき、冬(句)(三三)

冬つゞき、新年(句)(三四) 春(句)(三六)

年譜……………二五九

長與善郎集

卷頭寫眞(照影)

序 詞(筆蹟)……………二六三

小説篇

竹澤先生と云ふ人(前篇)……………二六三

竹澤先生と云ふ人(後篇)……………三四六

戯曲篇

陶淵明……………四三七

五祖と六祖……………四四九

(附) 空家(四四八)「詩か散文か」より(四五九) ホームシック(四六〇)

「論文及び雑感」より(四六四)

年譜……………四六一

室生犀星集

卷頭寫眞(照影)

序 詞(筆蹟)……………四六六

幼年時代……………四六七

性に眼覚める頃……………四八九

或る少女の死まで……………五二八

蒼白き巢窟……………五五〇

美しき氷河……………五七七

香爐を盗む……………五九三

(附) 晝寝(四八八) 漱石の發句(五六一) 野いばら(五九二) 「初

(秋日記」より(六七)

年譜……………七〇七

久保田万太郎集

Handwritten musical notation consisting of five staves. The notation includes various symbols such as vertical strokes, dots, and horizontal lines, which are characteristic of early manuscript notation.

末

枯

鈴むらさんのところへ、このごろ、扇朝が始終這入りこんでゐるといふ風説を聞いてせん枝は心配した。何とかしなければいけないと思つた。——だが、何とかしたいにも、一月あまりといふもの、鈴むらさんは、まるでせん枝のところへ顔をみせなかつた。——來なければならぬはずのせん枝會の日にも到頭出て來なかつた。

さうでもないと思つて三橋に聞くと、三橋も、まるでそののち會つてゐなかつた。

「俺は、先々月の晦日、末廣の獨演會のかへりに川田さんや小山さんなかと玉秀へ行つたときつかりだ。」と三橋はいつた。「旦那はあれでなか／＼の氣まぐれだから。——大丈夫だよ、打捨つて置けば、そのうちにまたさびしくなつて出て來るよ。」

「氣まぐれは俺も知つてゐる。——だから、出て來ないのはちつとも構はないが、たゞ少し、聞きこんだことがあるから。」

「聞きこんだこと。——何を。」

「なめに、大したことぢやあないが、なんだかこのごろ、扇朝の奴がしきりに今戸へ這入りこむつていふからね。」

「扇朝。」三橋には分らなかつた。「何だい、扇朝つていふのは。」

「以前あの梅橋のところで極枝といつた爺さんさ。——去年の夏ごろ、よく俺のところへ來てゐたから知つてゐるだらう。」

「あゝ彼奴か。——彼奴なら知つてゐる。——だけれど、また、何だつて旦那があんなものを。」

「會つてそれが聞きたいんだ。」せん枝はいつた。「どんなものが立ちまはつたつていゝけれど、彼奴はいけない。——彼奴だけはいけない。——彼奴は義理を知らない人間だから。」

「それには、旦那も、このごろ少したじれの形があるからね。」

朝るやうに三橋はいつた。

「たじれの形があるから。——だからいけない。」せん枝は嘆息するやうに「人間曲つたとなると、矢つ張イクチのないものだ。」

このごろの鈴むらさんの退屈な、さうして、便りない、枯野のやうな生涯がまさらのやうにせん枝の胸に浮んだ。——蔭で、いろ／＼、何のかの勝手なことはいつても、考へると——すこしでも以前のことを考へると、矢つ張、なほ、せん枝は、暗い、泪ぐましい心もちになることが爲方がなかつた。

せん枝が扇朝のことを「彼奴は義理を知らない。」といふのには理由がある。

いはなければ分らないが、全體扇朝といふ男は、二代日の梅橋の弟子で、十二三の時分にもう別ビラの眞打だつた。器用でもあつたのだから、人間が親孝行だといふので、ことのほか梅橋に目をかけられた。十四のとき、両親にわかれ、それからずつと梅橋の手許に引取られて、ゆく／＼は三代目梅橋にもなる位なつもりで修行をしてゐるうち、十六のとき、根津の菊岡の樂屋で、平常から仲のよくなかつた兄弟子に喧嘩をうられて、腹の立つたまぎれそこにあつた煙草盆を叩きつけて、相手に怪我をさせた。扇朝にしてみると、(その時分にはまだ扇朝とはいはなかつたが)自分はたゞうられた喧嘩を買つ

たまでのこと、怪我はさせても、自分になにも悪いところはない位に思つてゐたが、それが師匠の梅橋の耳にはひとと、以ての外のことと散々小言をいはれた。——扇朝はまた腹が立つた。師匠がまるで自分に好意を持つてくれないのがたまらなく腹が立つた。——勝手にしろとばかり、梅橋のところを飛びだして、そのまゝ東京の土地を離れた。明治二年の秋だつた。

とにかく大阪まで行くつもりで、東海道に乗りだすと、藤澤で思ひげなく東京のある最上のお客にあつた。事情を話すと、そのお客が大へん同情して、さういふことなら當分俺が面倒をみてやらうといつてくれた。——大阪へ行きたいなら大阪へもやつてやる。——悪いやうにはしないから、何にしても俺と一しよに來たはうがいゝといはれて、そのまゝ、そのお客について箱根から三島へ入つた。さうして三島に二月あまり逗留した。

漸次、日のたつにつれて、扇朝は、矢つ張生れた故郷が戀しくなつた。それには懷の都合もよくなつて、いつまで草深いところに愚圖々々してゐることが下らなくなり、いゝ加減なことをいつてそのお客の前はごまかし、即日、一人になつて三島を出た。

眞つ直に東京に入ればいゝ奴を、途中横濱に寄つて、うっかり横濱の景氣に引つ懸つた。ちやうどそれは開港當時。——困つたら、どこかの寄席にたのんでつかつてもらへばいゝと腹をきめ、半月ばかりぶら／＼遊んでゐるうちに、不圖したことから、ある女義太夫の一行の上置になつて、上總の東金のはうへすこしの間稼ぎに行く相談が出来た。

扇朝のもりでは、大抵十日か十五日位で釋放されることと思つてゐたところ、その東金の興行が莫迦なあたりかたをして、それがために、ついでにその一行は、更に安房の方をずつとまはつてあるくことになつた。

方々まはつてあるいて、ちやうど勝浦のちかくのある村にかゝつたとさだ。——そこのある網主の娘に扇朝はすつかり思ひつかれた、是非とも嫁になつてくれといふ掛合になつた。

さすがの扇朝もおどろいた。——だが、考へたのに、自分もこれから東京へかへつたところで爲方がない。師匠に訛をいれるのも業腹だ。——訛をいれて、もしその訛がきかなかつたらそれつきりだ。よしんばすぐ訛がかなつたところで、これからのまだ修行といふことがあつた。——これからの修行がほんとの修

行。——だが、苦勞して、首尾よくその修行をつんで、一人前の藝人になつたところそれが何だらう。——よし三代目梅橋になつたところが多寡が知れてゐる。——世の中は堅氣のことで。——堅氣にかざる。ふとかう扇朝は決心した。さうして、生れながらの——前にいふのをわすれたが、全體扇朝の親といふのが田舎まはりの講釋師だつた。——藝人の足を綺麗に洗ふことにした。

金はある、娘は惚れてゐる、いふ目はなんでも出る。——扇朝にとつてそれは何もいふところのない月日だつた。だが、二年たち、三年たちするうち、漸次扇朝はその生涯にあきたらなくなつて來た。その生涯が退屈になつて來た。——堅氣といふものは思つてゐたほどいゝものではなかつた。

祭禮だとかなんだとか、何か機會があるごとに、扇朝はとき／＼以前の梅橋の弟子にかへつた。せめてものそれが慰籍だつた。——だが、それが漸次病みつきになり、そのうちには、道樂半分、たのまれて近間の寄席や芝居に出るやうになつた。さうなると當年の別ビラの眞打——周囲が捨て置かなかつた。ちきに扇朝は、五里六里さきまで始終出張つて行かなければなら

ないやうになつた。

川だちは川に果てる。矢つ張る方がなかつた。——それから三年たつたとき、扇朝は五六人の一座をつれて、旅から旅をまた廻つてあるく不幸な藝人になつてゐた。さうして、それからまた五年たつたときには、田舎まはりのある女役者の、亭主のやうな男妾のやうなものになつてゐた。——同時に、それは、中村なにがしといふ藝名を持つ三枚目どろの若い役者だつた。

二十三の夏から二十七の冬までその女役者と一しよに暮した。——大切にされるまゝ、はじめのうちは何とも思はなかつたが、そのうちにまた漸次その境涯に満足が出来なくなつて来た。——勝浦に置きざりにして来た娘のことが思ひ出された。——何だか知らないが矢鱈に東京が戀しくなつた。——といつて、扇朝は、思ひきつて、その女から離れることも出来なかつた。扇朝よりも女の方が年をとつてゐた。——扇朝は何かある強い力にひきずられながら生きてゐるかたががあつた。

と、明けて二十八の春、常陸へ興行に行つたときだつた。狂言は「加賀見山」の通しで、その女はおはつ、扇朝の役は「烏啼」の提灯奴だつ

た。——土地の人氣になつて芝居は大へんな景氣。——「烏啼」の幕があいて、いつものやうに、扇朝が、揚幕からおはつに提灯をみせながら出て来ると、だしぬけに、土間から、一腰拔が。

亭主のくせにかゝあの提灯もちをしてゐやあがる。」と大きな聲で怒鳴られた。——扇朝はもう少しで提灯を抛り出すところだつた。——何ともいへず、さびしい、便りない心もちになつた。——樂屋へ入ると、書置を書いてそのまゝ

すぐ芝居を飛出した、さうして、その日のうちに東京へかへつた。

だが、東京へ歸つたものの、歸つてみると、十年の間に世の中はまるつきりかはつてゐた。

たのみに思ふ師匠の梅橋はもうあの世の人になつてゐた。まへに燕路といつてゐた奴が燕橋となり、梅橋にかはつて組合の牛耳をとり、さうして梅橋の名跡——扇朝がつぐかも知れなかつた——は、その燕橋の弟子の、扇朝も碌に知らないやうな人間が繼いでゐた。

いまさら燕橋のところをたよるのは業腹だつた。といつて、さうするのが眞實ではあるけれど、今度の三代目梅橋をたよることはなほのと出来なかつた。——扇朝はそこで濱町の不動新道の初代柳朝のところをたづねた。さうして

改めて柳朝の弟子になつた。

柳朝は師匠の梅橋でさへつねに推服してゐたほどの人情、癖の名人だつた。

扇朝は、身にしみて稽古した、いままでの道草をとりかへすために骨身を惜まざ稽古した。——柳朝もその才分をみとめて特に肩をいれてくれた。

だが、一年たつたかゝないうち、扇朝は、そのあたらしい師匠に死にわかれた。——それからそのゆく／＼二代目になるべき若い師匠の柳橋についてゐると、一年たゝないうち、またその若い師匠も煩ひついた、さうして間もなく大いし師匠のあとを追つた。

柳朝の畑のものはもう痛ましかぎりだつた。

それには引きかへて、燕橋は「藏前の大師匠」の名がいよ／＼高くなるばかりだつた。延いて燕橋の手のものでなければ夜も日もあけない有様だつた。燕橋の部屋のものでなければどこの寄席でもいゝ顔をしなかつた。——こゝにいたつて、扇朝は、まつたく不幸な人間だつた。

辛抱に辛抱をした。出来るだけの辛抱はした。——だが、扇朝は、どうにかしなければその日のことに事を缺くのだつた。

誰に相談するやうもなく、それには自棄も手傳つて、みづから扇朝は浪花節の仲間、身を落した。——で、ちやうど七年そのなかで暮した。

取るものもとれれば、手厚くもされ、大抵な我儘でも通してくれるけれど——取るものごとく、とれるほど、手厚くされればされるほど、我儘を通してくれ、ばくれるほど、それがかへつて苦患だつた。さすがに、扇朝も、その境涯に安住し盡すことは出来なかつた。

「藏前の大師匠」が死に、つゞいて三代目梅橋も死んだ。——世の中の形勢はうごきかけた。

四代目梅橋が出来た。——三代目と違つて、四代目は、師匠の二代目に由縁のあるものだつた。

扇朝はすぐそこへ睡けつた。

その四代目の心配で、扇朝はふたたび組合のなにかへることが出来た。板枝といふ名前前で、改めてまた四代目附の人間になつた。

ちやうど、そのとき、扇朝は三十九だつた。

それから十年。——はじめのうちは、柳朝うつしの人情噺のたんねんなところが評判になつたが、年々、後から後からと、若い、元氣のいゝ連中は出て来る。——いくら負けない氣

でも、時代（じだい）のかはつてくることは何うにもならなかつた。——それには全體四代目といふ人へ人氣がなかつた。——ウダツのあがらう道理がない。——漸次（せんじ）扇朝は賣（う）れなくなるばかりだつた。

見かねて、梅橋が、自分から發金（はつぎん）になり、眞打（まうち）たちにたのんで、扇朝のために上野の鈴木で演藝會（えんぎかい）を開いた。さうしてその上りを扇朝に養老金（ようろうきん）としておくつた。——それを貰つて、扇朝は、寄席（よせ）を退（ひ）いた。

この演藝會（えんぎかい）について上野の師匠（ししやう）が大へん力をいれてくれた。——そればかりでなく、そのあとでまた扇朝のためにとくに獨演會（どくえんかい）をやつてくれた。——さうしてその上りをすべて扇朝の所有にした。

いつもながら上野の師匠（ししやう）は同情（どうじやう）が深かつた。

話がぐだぐだしくなつたけれど、せん枝が「彼奴（やつ）は義理（ぎり）を知らない。」といふのはこゝだつた。——とにかく、これだけのことをして貰ひながら、扇朝はあとで、上野の師匠（ししやう）のところへ顔出しさへしなかつた。

何（なに）といはれてもそれは爲方（ゐかた）がなかつた。——「ふざけてゐやがる。」「師匠（ししやう）を何（なに）と思つてゐやあがるんだ。」と師匠（ししやう）思（おも）ひの上野（うの）の弟子（でし）たちは

誰もみんな腹（はら）を立てた。——ことに、さういふことになると、何處（どこ）までも、堅氣（かたき）な、几帳（きちやう）面（めん）なせん枝だ。それまでは、眼（め）が不自由（ふじゆう）になつてからも、ときどき手許（てしよ）に呼（よ）んで、柳朝（りやうてう）うつしの噺（はなし）稽古（けいこ）をしてゐたのを、それ以來（いらい）、ビタリと扇朝（せんてう）の出入（でしゆ）をとめた。

「あんな腸（はわた）の腐（くさ）つた奴（やつ）。」

せん枝はかういつた。——かういつて飽（あ）くまでも憎（にく）んだ。

去年（こぞ）のちやうど暮（くれ）の話（はなし）。——だが、扇朝（せんてう）にしてみると、扇朝（せんてう）にはまた扇朝（せんてう）の理窟（りくつ）があるのだつた。

今年（こぞ）は十月（じふがつ）になつてもなほ残暑（ざんしよ）が強（こゝろ）かつた。日のいろがいつまでも濃（こ）くあかるかつた。——と、ある夕方（ゆふぐ）方（かた）から降り出した雨が、あくる日に

なつてもやまず、どうやらそれは暴瀝（はうれき）様のやうにもなつた。——再び晴（は）れた青空（あおぞら）をみるこゝが出来たとき、その青空（あおぞら）のいろがもう水のやうに澄み盡（き）してゐた、さうして、身（み）にしみて冷めた

い風（かぜ）がふいた。

「有（あ）難（がた）い。——助（すけ）かつた。」

せん枝は眞實（まじつ）に蘇生（よみがへ）つたやうに思（おも）つた。——

眼の不自由なものにとつて、暑いほど、辛い、苦しいものはなかつた。

九月のせん枝會に出て貰つた禮もあり、かたがた、半年ぶりほどでせん枝は上野の師匠のところへでかけた。そのかへりに、山下から廣小路の方へ出るやうに俤大について、氣の向いたまゝ、新堀の、三橋のところを驚かした。

昨夜出て、三橋はそのすこし前にかへつたところだつた。——湯に行つて來て、ちやうどいま一杯はじめようとしたところだつた。

「——さうかい、上野のかへりかい。——でもよく寄つてくれた。」

三橋は、土間に下りて、せん枝の身體を格子のなかに抱き入れた。

「二階がいい。」といつて、そのまゝ、二階へまたつて上つた。

「ちやうど好かつた。——實は俺もいまかへつて來たところだ。」わざと聲を低くしていつた。

「多分そんな事だらうと思つたよ。」せん枝は笑つて、「全體このごろはどこを稼いでゐるんだ。」

「紫陽花は浮氣する人意見の花よつていふ都々一を知つてゐるかい。」

「厭な奴だ。」せん枝はいつた。「道理でこのろ山谷までよく用たしに來ると思つたよ。」

「まはり廻つてもとの色さ。——分つたかい。」三橋は笑つてかういつた。

去年の春、すこし面白くないことがあつて弟とわかれ、夫婦でべつにいまの金井山下瓦町——今戸橋のそばの河岸に世帯を持つてから、一年半ばかりの間、三橋はあとにもさきにもたゞの一度——それもせん枝が煩つてゐるときに——しか出て來なかつた。せん枝の顔を見るといつも「新さん、濟まない、そのうちにきつと行くよ。」といつたけれど、さういふばかりで、矢つ張出て來なかつた。用があると女房をつかひに寄越した。——それほど無精な人間が、夏から此方どうした風の吹きまはしか、さういつても繁々顔をみせるやうになつた。——「山谷まで用たしに來たから寄つたよ。」と、いつもキマリでさういつた。

「新ちゃんにも一度逢ひたいといつてるぜ。」と三橋は言葉をつたへた。

「誰が。」

「誰がつて分つてるぢやないか——手前どものがさ。」

「手前どもの。——どうして手前どものが俺を

知つてゐる。」

「信夫さんのところの新ちゃん。——かういつたら分るだらう。」

「古いことをいひだしたぜ。」せん枝はまつたく思ひがけないやうに「一だけど、さういつたつて、まさかにあの雲井さんの華魁でもあるまいが。」

「ところがその雲井さんの華魁だから可笑しいだらう。」

「どうして。——でも、あの女は、その後、落籍されるかどうかしてゐなくなつたんぢやないか。」

「ゐなくなつた。——ところが、それがまた、この春、吉原へかへつて來たんだから可笑しいだらう。」

「三橋師匠が戀しくなつたとしてもいふのかい。」

「それがね、種々そこには深い事情があつてね。——聞いてみれば可哀想な身の上さ。」

「定文句をいつてるぜ。」せん枝はいつた。「相變らず女にかけるとダラシがないんだな。」

「ダラシがないはいんだらう。」

かういつて何の屈託もないやうに三橋は笑つた。

せん枝は三橋がうらやましかつた。——それ

はもう十年も前のこと、死んだ柏枝が先達で、三橋とせん枝は始終聞さへあれば吉原へ出かけてゐた。毎晩寄席で顔を合して——弟子師匠の關係はなかつたが、柏枝も三橋も、矢つ張上野の師匠の手の人間だった。——席割を掴むと、三人はそのまゝわかれることが出来なかつた。電車のなくなる時分までどこかしらで飲んでいた。さうして舉句は大てい家へかへらなかつた。——雨でもふつたり雪でも降つたりすることにした。——

京町のある古いと固いで通つた見世。——柏枝はそのお職の吉野といふ女のところへ三年といふもの通ひつづけた。三橋の馴染は雲井といふ女、せん枝の馴染は信夫といふ女だった。——柏枝でも三橋でもせん枝でも、いまからはとても考へられないほどトボ／＼してゐた。随分ときには無理なことまでして女のところへ運んだ。——種々そこには可笑しいこともあれば悲しいこともあつた。

その柏枝は氣が狂つて死んだ。死ぬ間際まで柏枝はその吉野の名を忘れなかつた。——三橋は柏枝のゐなくなる時分から漸次賣り出した。江戸前のシツカリした藝が評判になつて、いまでは「柳」で屈指の人氣役者になつた。——同時

にいよく道樂者になつた。——その間にせん枝は眼が悪くなつた。寄席へ出る事が出来なくなつた。——去年の夏、鈴むらさんの心盡しで「せん枝會」といふものが出来、いよく他人にたよつて行かなければならなくなつたと、せん枝の來しかたは暗い苦惱と悲痛とに満たされてゐた。

だが、せん枝は強情だった。負けない氣だった。——女々しいことがきらひだった。

「何うなるものか。」せん枝はかう思つた。飽くまで多寡をくゝつた。——今まで通り誰とでもつきあへば、今まで通り酒も深く飲んだ。さうして、今までよりも嵩にかゝつて熱心に噺の稽古もした。——だが、そばからその心もちは減びかけた。さういつても漸次人間がイクデがなくなつた。

「下らない。——どうしたといふんだらう。」

無理から自分を抑壓へようとすればするほど、便りない、さびしい心もちが——何ともいへない、便りない、さびしい心もちが胸の底から湧いた。「せん枝會」の末始終、自分の末始終。——さういつたやうなことが諺もなく思はれた。諺もなく悲しく思ひ遣られた。——ことにこのごろそれが酷くなつた。

「うしたい、新さん。——心もちでも悪いのかい。」

せん枝のなんとなし浮かない顔のいろをみて三橋はいつた。

「何だどうもしやしない。」せん枝はいつた。久しぶりで外へ出て、すこしボンヤリしたかたさ。」

「さうかい、それならいゝけれど。」三橋は銚子をとつて「どうだい、熱い奴をつがうぢやないか。」

「貰はう。」

せん枝はチャブ臺のうへのコップを手さぐりにとり上げた。

「何だ知らないが今日は莫迦に酒がきく。」

さういひながら三橋は自分の盃のなかも一杯にした。

「好い陽氣になつたから。——これからまた漸次酒がうまくなる。」せん枝もいつた。「それはさうと、此間の日曜、立花の獨演會は莫迦な景氣だつたといふぢやあないか。」

「誰がそんなことをいつた。」

「衆公が来てさういつてゐた。」

「駄目さ、二百來ないんだから。」三橋はいつた。「あの日はまた悪い日で、若竹に上野の師

匠の獨演會、末廣に柳生さんと柳藏さんの二人會さ。——一寸これでは立つ瀬がなからうぢやないか。」

「まだあつたぜ。——あの日は上野の鈴本に柳雀獨演會といふものがあつた。」

「あんなものは。——あんなものは構はない。——どうせ三四十しかとれやしないんだから。」

「どうしてあの人はあゝ賣れなくなつたかねえ。」

「老耄るばかりさ。」

「だが、客も薄情だよ。」

不圖せん枝に藝人の「人氣」といふことが思はれた。

そのまゝしばらく話は稼業のうへにあつた。種々、席亭の分らないことや組合のもののみんな尻腰のないこと。——このごろの若い眞打の問題にならないほどクヤなことや、漸次、上方風の知らない、灰汁のぬけない、白癡おどしのやうな藝の高座に勢力を得て來たことなんぞについて三橋は口をきはめて罵つた。

「お前さん、旦那がみえましてよ。」と階下から聲がかゝつた。

「旦那、——旦那つてどこの旦那だ。」

「鈴むらの旦那ですよ。」

「何だ。鈴むらの旦那だ。」

かういつてゐるうちに、「ずん／＼上つて來たぜ。」といひながら鈴むらさんが相變らず肥つてゐる身體を階子口にあらはした。

「これはおめづらしい。」三橋はいつた。「久しくおみえになりませんでしたね。」

「大へんにござさたしてしまつて。」と鈴むらさんは元氣よく笑ひながら、「新さん、しばらく。」

「眞實に、旦那、どうなさいました。」せん枝も鈴むらさんのはうへ顔をむけた。

「このごろは何だか知らないが莫迦に人間が無精になつてね。」鈴むらさんはいつた。「何だから外へ出るのが億劫でね、——毎日家にゴロ／＼ばかりしてる。」

「先月はとう／＼會のときにもみえなくつて。」

——旦那はどうなすつたらうと、お玉の奴なんかはしきりに案じてゐました。」

「あのときは濟まなかつた。——いゝえね、あのときはね、出掛けるつもりで飯を食つてゐるところへ客が來てね。——一杯はじけたものだからついそのまゝになつてしまつた奴さ。——とうとうそれから日の暮れるまで。」驚いたよ。」

「旦那、何にもありませんが。」と三橋は盃をさした。

「有難う。」鈴むらさんはそれをうけとつて、「此奴は御馳走になり來たやうなものだな。」

「先刻一人ではじめようと思つてたところへ思ひがけなくこゝが來ましてね。」

「さうかい。——何しろうまいところへ飛込んだよ。」

さした。

三橋のすゝめるまゝに鈴むらさんはつゞけて二つ三つ盃をかさねた。

鈴むらさんは、それは、八丁堀の妹のころへ行つたかへりだつた。産後がいけないと聞いて、心配して行つてみると、何の事、病人は二三日前に修善寺へ行つたあとだつた。——とにかくその妹の亭主といふのは、質屋仲間でも有名な堅い陰氣な人間、法華の凝りかたまりで、だもよう稼業大事と心にかけてゐるばかり。——とても鈴むらさんの相手にはならなかつた。妹のゐない以上。——妹がゐたところで格別どうといふこともないが、それでもまだ妹は親身だつた。——とても一時間とそこに辛抱は出來なかつた。ちやうど時分きだからといはれたのを、斷つて、無理から鈴むらさんは引下つた。——だが引下つて、外へ出たものの、外へ出てみると、まだ家へかへるには時間が早い。——

そこで、途中で電車を下りて、久しぶりに三橋のところをたづねてみようと考えた。——留守かも知れないが、もし三橋が留守だったら、小島町まで延して伯鯉のところへ行くつもりだった。

「でもね、俺のやうなものでもそれ相當に兄貴のあつかひをして呉れる。——なんだか氣の毒だね。」鈴むらさんはかういつた。

三人になつてまた酒が弾んだ。——せん枝はコップを手から離さず、三橋と鈴むらさんは間斷なく盃をやつたりとつたりした。

「さういへば、新さん。」鈴むらさんは何か思ひ出したやうに「眞砂壽司の爺さんの死んだのを知つてゐるかい。」

「眞砂壽司。——あの馬道のですか。」

「あゝ。」

「いゝえ、知りませんよ。」

「其奴は初耳だ。側から三橋もいつた。『何時ですね。』」

「何だ、三橋師匠も知らないのかい。」と鈴むらさんはその方を見て「俺も何時だかは知らないが、二三日前、夕方、犬を連れ一公園まで行つたかへりにあすこの前を通つたら戸がしまつてゐる。——聞くと爺さんが死んで、それつきり

見世をしめんださうだ。」

「さうですか。三橋は思ひがけないやうに、

「だはれど、あのぢぢい、ぶち殺したつてくたばりさうもないぢぢいだったけれど。——分らないものだ。」

「強情なぢぢいだったがねえ。」

染々とせん枝もいつた。

「強情にも強情でないにも。——あんな面の憎い奴もなかつたよ。」三橋は吐きだすやうにいつた。——三橋はもう大分まはつて来た。

「柏枝が喧嘩したことがあつたぢやあないか。」

「あのときは私が一しよでしてね。——せん枝は顔をあげて『小山さん——たしか小山さんでした、それに小梅の宗匠と誰だつたか暫間。——眞砂の壽司を喰ひに行かうつていふことになつて、吉原からわざ／＼馬道まで出向くと、あのぢぢいがゐて、此方を厭な眼つきでジロリとひながら、膠もなく『もうお生憎さまでした。』——知らない顔ならまた爲方もないけれど、随分長い間の馴染で、此方の次第もすこしは知つてゐるはず。——折角来たんだからどうかして呉れないかといふと、平氣でそこいらをひたづねながら、種がないから駄目だ。——大抵腹が立つでせう。——勝手にしやがれとばかり飛びだし

て、それつきり半年ばりといふもの柏枝はまゐるつきり足踏をしなかつた。」

「さういふ奴なんだ。」

三橋は合點をうつた。

「だが、いゝものをつかつて、うまい壽司を喰はしてくれたね。」と鈴むらさんは今更のやうにいつた。

「それは眞實です。——何といつたつて、この土地では、藏前の音羽壽司があすこまでしたらうね。」

「だつて、何だつていふぢやないか。——誰だつ

けか音羽壽司へ行つて、あすこのおやぢに、馬道の眞砂つていふうちは一寸喰はせねつていつたら、土地で、うちでなかつたらまあ彼處だらうといつたつていふぢやあないか。」

「それから、その足で、馬道へ行つて、眞砂のぢぢいにまた、藏前の音羽つていふうちは一寸喰はせねつていふと、淺草で、うちでなかつたらまあ彼處だらうといつたといふ奴でせう。」

「それさ。」鈴むらさんはうなづいて、「ただと俺は、誰に聞いたのだつたらう。」

「旦那、それは柏枝ですよ。」とせん枝は笑つた。話はまだ柏枝のことに落ちた。——柏枝を眞中にして、七年まへ、八年まへの世の中のこと

と。——鈴むらさんの深川の寮で毎年やつた初
午や七夕のこと、吉原でやつた時雨忌のこと、

それには、柏枝がいひ出して、鈴むらさんとせ
ん枝と三人、日本橋のある待合の二階からその
まゝ潮來へ遊びに行つたこと。——そんなやう

なことがそれからそれと話された。今さらのや
うにそこに話された。小山さん、五秋さん、登
美平、小梅の宗匠。——そのころの人たちのこ
とが可憐しくせん枝の胸に往來した。

不圖話が途切れた。障子にあかるくきして
ゐた日かげもいつの間にか消えた。——空のい
ろがもう漸次褪めかけて、外はなんだかすこし
風立つて來たやうな工合だつた。

「旦那、熱い奴を一つ。」と三橋は階下から持つ
て來た銚子をとり上げた。

「もういけなない。」鈴むらさんは手をふつて「も
う俺は駄目だ。」

「そんな莫迦なこと。——小さなものでいけな
ければ大きなものにしませう。」

「飛んだ事だ。」鈴むらさんは笑つて、「このご
ろは、もう、からイクヂがないんだ。」

「イクヂがない何も何。——旦那、恥をかゝし
ちやあいけない。」

「ぢやあ飲むよ。——此奴へ貰はう。」鈴むら

さんは斯ういつてそこにあつた茶のみ茶碗を出
した。

「感心。」三橋はいつた。「どうだい、新さん
は。」

「満々といいでくれ。」

「満々と。」よし。」

三橋は満足さうにいつた。——せん枝のコッ
プにいふ通り満々といひだあと、自分も湯のみ
で呷りつけた。

「旦那。」ふとせん枝は改まつていつた。「旦那
にすこしいふことがあるんですが。」

「いふこと。——何だい。」

「このごろ旦那のところへ扇朝がよく行くさう
ですね。」

「あゝ来るよ。」と鈴むらさんは何のこともない
やうに「このごろは橋場にあるんでね。——近

いものだから毎日のやうにやつて来る。」

「旦那は彼奴について何にもおきゝになりませ
んか。」

「彼奴について。——以前よくお前のところへ
來てゐたんで俺は知つてゐるんだが。」

「去年の暮以來、私のところへはもう來られな
い人間です。——それは御存じでせう。」

「あゝ、それは聞いたよ。」鈴むらさんは笑つ
て「三代目に種々厄介になりながら、後で顔出
しをしたとかしないとか。——それでせん枝さ
んのところもしくじつたやうな當人がそれはさうい
つてゐたよ。」

「人間莫迦は構ひません。——だが、義理を知
らないのは——人間義理を知らないのはいけま
せん。」せん枝はキツパリいつた。「困るだらう
と獨演會までしてもらつて——それも上野の師
匠は何の因縁もあるのではなく——それつきり
腹んだともつぶれたとも挨拶一つしないのはあ
んまり筋がちがひすぎます。——それも十九や
二十の何にも知らない人間ならまた爲方ないとい
ふこともあります。五十の坂を越して、すこ
しは苦勞もして來たやうなことをいふ人間にし
てみると——此奴は、旦那、腹を立てる方が眞
實でせう。」

「全體ふざけた畜生だよ。」と側から三橋はい
つた。

「さういへばさうだけれどね。」鈴むらさんは
宥めるやうにいつた。「扇朝だつて決して、上野
の師匠の心もちを仇やおろそかには思つてや
しない。——それは顔出しをしないのは扇朝が
悪い。顔出しをしないのは悪いけれど、だが顔
出しをしなくつても、扇朝は、あのときの獨演

會の番組を頼にして、神棚のなかにかざつてゐる。さうして朝夕手を合してゐる。」

「……………」

せん枝は何ともいひなかつた。

「それも、上野の師匠と、扇朝と、何の因縁もないといへばないけれど、あの男がまだ柳朝のところにゐる時分、三代目もまだ先代の遊雀のところ、愚圖々々してゐた時分、始終木原あたりの樂屋で顔をあはせてゐたんださうだ。——ときには羽織の貸しあひ位したこともある。——いつてみれば昔馴染だ。——それが一方は運があつて大真打になり、一方は運がなくて、すっかり尾羽うち枯しいまの爲體さ。——三代目にしたら種々それも考へるだらうから。」

「旦那、其奴はいけません。」とせん枝は遮つた。

「なぜ。」

「人間つて奴は運ばかりぢやありません。——

上野の師匠が今日のやうになり、扇朝がいまのやうになつたのも——いつてみれば心がらです。——あんな扇朝のやうな量見かたの奴のウダツの上らう道理がありません。——旦那のいふやうに、昔馴染といふやうなことがそこにあつたにしても、以前は以前です。以前はどう

であらうと今では譯がちがひます。」

「俺はさうは思はない。」鈴むらさんは飲みかけた茶碗を下に置いて「扇朝は藝人だ。——量見かたもそれは入用だらうが、量見かたよりも藝人は藝のことだ。——あれだけの藝を持ちながら、下らなく埋木になつてゐる扇朝が俺は可哀想だ。」

「可哀想。」
「あ、可哀想だ。——俺はあの男の嘯を聴いてゐるとなんだか涙がこぼれて来るやうな心もちになる。」

せん枝は不圖口を噤んだ。淋しく眼を伏せた。
「旦那、そんなに扇朝はうまいんですか。」側からまた三橋はいつた。

「俺はうまいと思つてゐる。」
「柳生さんとどつちがうまいでせう。」

「柳生と。」鈴むらさんは三橋の顔をみた。「ものには大抵方圖があつた。——柳生といつたらとにかく今での名人といはれる藝人だ。扇朝は賣れなくなつて寄席を退いた藝人だ。——とてもそれは一しよにはならない。——一しよにする方が無理だ。——だが、俺だけのことにすると、次第によつては、柳生よりもうまいと俺はいふ

かも知れない。」

「柳生よりもうまいと。」

「俺はさういふかも知れない。」鈴むらさんは再びいつた。「俺にも意地がある。」

「勝手にしやがれ。」

三橋はイキナリ盃をとつて投げつけた。——あぶなく鈴むらさんの肩を掠めて盃はうしろに落ちた。

「何をしやあがる。」

かういひさま鈴むらさんはチャブ臺に手をかけた。たちまちチャブ臺は覆つた。

たゞならぬ物音を聞いて、驚いて、階下から三橋の女房や番頭が上つて來た。

「お前さん、まあ。」

三橋の女房は、慌てて、煙管をとり上げた三橋の手許に縋りついた。

「打捨つといてくれ。——黙つておればいゝ氣になつてふざけたことを吐かしやあがる。もう量見が出来ねえんだ。」

「お前さん、まあ。——旦那にそんなことをいつて。」

「旦那面がどこにある。——もう量見が出来ねえんだ。」

三橋は、全くもう血相をかへて、身悶してか